

ASSOCIATION JAPON DE LA PRESSE SPORTIVE

A J P S

日本スポーツプレス協会会報

NEWS



APR 22

NOVEMBER.1
2004

2004年A.J.P.S.報道写真展「eye's」INDEX

アテネ・オリンピック、EURO2004、サッカー・アジアカップetc.レポート



アテネでは惜しくもベスト16で終わってしまった愛ちゃんですが、ほんとうによくやっかって思えてしまう存在です。よね。たとえ負けたとしても、「あーあ…」、「なんで?」、そういう感情がうまれてこない。「よくやったね」、「惜しかったね!」って、そんな気持ちで愛ちゃんを見たい。そんなことを思ってしまうのは私だけでしょうか。

普段の現役女子高生の愛ちゃん。淡々とした、飄々とした感のある愛ちゃんの姿、テレビのトーク番組などで見える愛ちゃんのちょっとトボケた姿。そしてもちろん、試合で見せてくれる、ちょっと触れがたい感のある凜々しい顔。どれもが原愛という人間の一面に過ぎません。そんな愛ちゃんの試合中のほんの一時を写したものです。湯煙煙コートからアドバースを受ける愛ちゃん。2人の視線、気になりました。

映像の流れの中では目に留めることのできない一瞬、一面を見たい、見せてあげたい、そんな希望が叶えられればフォトグラファー冥利に尽きるってもです。

田中宣明
TANAKA Nobuaki

■撮影者プロフィール

1970年東京生まれ。小さいころからの馬好き、馬乗り好き(?)が転じて写真に興味を抱く。大学を卒業後、東京はジュエルアート写真学校で写真を学び、スポーツ写真の世界へ。ジャパンスポーツ代表の菅原正治に師事し現在に至る。



foreword

テレビ中心の世の中で
スポーツジャーナリストの生きる道とは

白髭隆幸
SHIRAHIGE Takayuki

ポルトガルで開催されたサッカーEURO2004、中国でおこなわれたサッカー・アジアカップ、そしてアテネ・オリンピック。今年の夏は取材に行っていたビッグイベントが目白押しだった。

その詳しい様子については、実際に現地取材したAJPS会員のレポートを読んでいただきたい。ここ数年のデジタル技術の向上が取材現場を劇的に変えているのがよく分かる。

さて、わたし自身は5月29日、バレーボールの世界最終予選(於・東京体育館)の取材帰りに交通事故に遭い、6月から3カ月間、通院自宅療養。ほとんど現場での取材ができなかった。取材に行ったのは8月あたりの島根県でおこなわれた高校総体くらいという有り様だ。

逆に、ビッグイベントのほとんどを茶の間のテレビでつぶさに見る事が出来た。そしてあらためて感じたことは、最近のスポーツイベントのほとんどが、テレビ画面最優先で作られているということだった。

こういう状況で、ライターやスチール・フォトグラファーが、今後いかにメディアに関わっていくのか。それはたいへん難しい問題かとも思う。

ことしの夏は暑かった。エアコンの利いた部屋でソファに座りピアグラスを片手にテレビを見ながら、やっぱり汗をいっぱいかいて現場で取材するのが一番だな、と実感したケガ上がりわたしただった。

C O N T E N T S

- | | | | |
|----|-----------------------------------------------|----|---------------------------|
| 4 | 写真単価は1枚400円の時代に入った? 薬師洋行 | 26 | 日本のスポーツ報道を考える 渡辺達也 |
| 6 | もう一つのオリンピック取材記 本ノ原久美 | 27 | 忘れられぬ中国人記者からのブライティング 岩崎龍一 |
| 7 | EURO 2004 PORTUGALを取材して 赤木真二 | 28 | アテネ・パラリンピック 望月公雄 |
| 9 | 写真展「地球にスポーツ」[eye's] 2004年 A.J.P.S.報道写真展 INDEX | 29 | ブラジルは女子サッカーを変えるか!! 藤原清美 |
| 25 | ワールド・フランス記者は1日にして成らず 土肥志穂 | 30 | 2006トリノ冬季オリンピックへの誘い 田中慎一郎 |
| | | 31 | 熱い男・黒木知宏 澤田公典 |

《地球にスポーツ》「eye's」 2004年A.J.P.S.報道写真展

■写真展タイトル:

《地球にスポーツ》「eye's」2004年A.J.P.S.報道写真展

■期間:

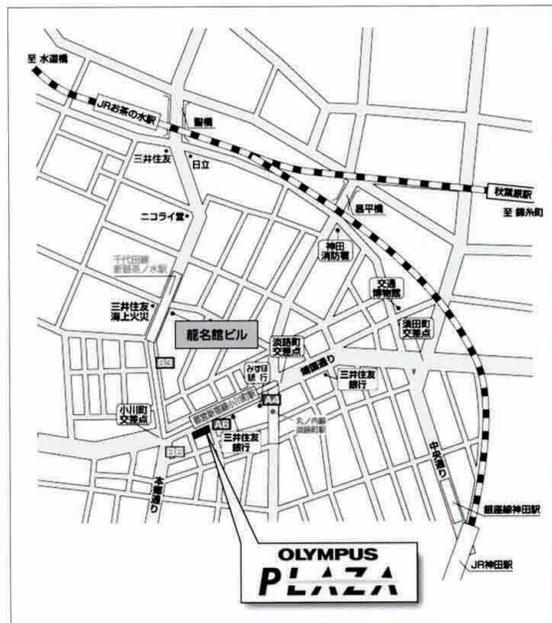
2004年11月11日(木)~11月24日(水)

■会場:

オリンパスギャラリー
東京都千代田区神田小川町1丁目3番1号
小川町三井ビル オリンパスプラザ内

■出展数:

約40点



■内容案内:

日本国内はもちろんのこと、世界各地で行われている様々なスポーツの現場で活躍しているA.J.P.S.。会員全てが題名となっている「eye's」、すなわち個々の視点で捉え感じて感性で感じ取った場面を作品として見ることのできるのが今回の写真展です。

国内外第一線で活躍しているスポーツジャーナリストが集まるA.J.P.S.の取材対象は、オリンピックやワールドカップサッカーをはじめとする各競技の世界大会、世界各地のサッカーリーグやメジャーリーグベースボール等のプロスポーツなど多岐にわたっております。この写真展において、実際に会場で見たり、テレビの中継などで見たあのシーンが新たな視点により呼び起こされたり、実際にその場にいるかのような臨場感を感じていただけるのはもちろんのこと、あの有名雑誌の誌面を飾った写真、貴方のお気に入りの選手の写真、日頃の新聞や雑誌等の紙誌面では見ることのできない写真に出会うことも出来ることと思われまます。

また、一般の写真と同様、スポーツ報道の写真においてもデジタル化が進んでおり、昨今の現場ではほとんどがデジタルカメラを使用しております。今回の写真展ではその特性を發揮できるように様々な技術を用いまして全ての作品をご覧いただくことができます。

それぞれ作品数の分だけの「eye's」視点を是非感じ取ってください。

2004年A.J.P.S.報道写真展実行委員会

- | | |
|------|-------|
| 委員長 | 水谷 崇人 |
| 副委員長 | 岸本 勉 |
| 委員 | 藤田 真樹 |
| 委員 | 飯村 健司 |
| 委員 | 和田 八東 |
| 委員 | 宮田 永明 |

6月も半ばを過ぎた頃、海外友人から“アテネ五輪に行く気はないか?”という一通のE-Mailが突然舞い込んできた。様々な事由(IDカードのこと、経済的なこと、8月23日から29日の間は日本での撮影があることなど)によってすでにテレビ観戦と決めていた私は、少なからずどのような返事をするか戸惑った。とりあえず“数日の時間が欲しい”と返信した。

もちろん私の脳裏にははばらくの間バルテノン神殿などアテネの風景が駆け巡ったことはいうまでもない。だがテロ、工事遅れ、宿泊料金の高騰など否定的なニュースも決断を鈍らせた。またほとんどのメディアはすでにアテネの取材態勢を整え、2ヵ月をきってからの発表の場探しも難しい。それも前半しか撮影できないとあればなおさらだ。戸惑いを感じつつも“せつかくのチャンスだ”と、アテネに行くことを決めた。

私にとっての夏季五輪は1972年のミュンヘンで開催された大会をチケット取材以来のもの。それから32年が過ぎていた。冬季五輪はすでに9回経験していたが、夏ははじめて同然。しかしこれまでスポーツカメラマンとして、サッカー・ワールドカップ、ウインブルドン・テニス、自転車ツアー・ド・フランス、モータースポーツのF1、全英オープン・ゴルフをはじめ、国内外で様々なスポーツは経験していた。はじめての種目も撮影するだろうが過去の経験を生かせば何とかなるだろう。期待に大きく胸を膨らませてアテネに向かった。

8月8日、ミュンヘン経由でアテネ入り。AJPS会員の藤田孝夫君の出入えをうけホテル入り。翌9日は時差調整と観光を兼ねてパシナイコ競技場やバルテノン神殿などを見物。しかし“五輪”の気配はそれほど感じられない。地下鉄入口の石畳などはまだ敷き詰めている最中、そういった細かい工事は開会式当日の朝でも続いていたが、夕方になってメイン・プレスセンター(MPC)そばのメイン・アクレディテーションセンターへIDカードの受け取りに出かけたが、その所在地は誰に聞いても分からない。オリンピックスタジアムに沿って歩くこと2~3キロ、何とか見つけてようやくIDカード(EP)をゲットしたのだ。

10日は午前中からMPCへ。メディア

キットの受け取りなどを流れ作業のようにこなし、最後はコダックブースでレジストレーションとフォトグラファー用のジャケットを受け取り、ほぼ終了した。いつの五輪でもこの流れは変わらず、IDカードとジャケットの受け取りでホッと一息というのが実感である。

MPCにしろ、スタジアムごとのサブ・プレスセンターにしろ、基本の通信事情はアナログでプリペイドカードを買っての利用。これには新聞社なども困っていたら

が、多くの写真を送稿するためADSLを別料金で設置したらしい。ただコダックブース内では無線LANがあって、私はこれを利用してしたが……。

開会式はヘルメットをかぶり、つなぎを着た工事人風の男の“Construction is over!”の一声で始まった。彼が司会者だったのだ。“108年ぶり、202の地域と国が参加し、工事遅れ”をジョークにした。2時間以上の選手の入場行進は長かったが、開会式そのものは“ギリシャ

アテネ夏季五輪2004 Report

写真単価は 1枚400円の時代に入った!?

薬師洋行



photo by Takamitsu Mifune

しが存分に出され、シンプルで良かった”というのが私だけでなく、おおかたの評判だった。

谷亮子の金、野村忠宏の金で弾みがついた日本は史上最高のメダル(金メダル16、総数37)を獲得し、日本中を沸せてくれた。6時間の時差がある日本では、たぶん多くの人がテレビ観戦で寝不足になったことだろう。しかし五輪に参加した選手たちの熱いプレーを観ているとそれも当然、あのアテネの炎天下、特に屋外の競技場でのプレーには心傷むものがあつた。会場を飛び歩いた私も朝から深夜までの撮影で寝不足になった。でもそれが4年に一度の五輪なのだろう。20日までの滞在で17競技を撮影した。

勝った人も、負けた人も、素晴らしいプレーを魅せてくれた。すべての選手たちに拍手を送りたい。

“IDカードが手に入る”ことで出かけた今回の五輪。それは嬉しくもあり、楽しい

ことではあつた。しかしこれからを考えた時、私たちAJPSのメンバーに降り掛かってくるかもしれない“暗雲”も感じ取ったので、レポートしておきたい。これはあくまでも私の私見だが。

海外のフォトグラファーはすでに出版系の仕事が激減、あつてもその写真準備は安い。そして取材費の出る仕事などは皆無に近いと聞く。まず取材に出かける時には取支を計算し、行くべきか否かを決めるという。それは当然の成りゆきだろう。特に種目の多い五輪ではいろんな競技を一人でカバーするのは不可能だから、しだいに単独での五輪取材は至難のわざということになる。中にはグループを組む者もいる。

シドニー五輪のことはわからないが、私の目にはその傾向はすでに2002年のソルトレーク冬季五輪から顕著になっていた。IDカードを取得できるにもかかわらず、五輪に來なかつた友人が多かつたからだ。その理由は前記のとおり“取支”である。まず出版業界の衰退は取材費の削減や写真単価の下落となり、フォトグラファーを直撃。そして出版業界は通信社や写真エージェンシーから流される安価な写真(質はわからないが)を使うようになったのである。

それはまたインターネットとデジタルカメラの急速な進歩ともリンクしているように思える。デジタルカメラは私たちの撮影環境を劇的に変えるとともに、情報通信の手段として便利で有効と思われたインターネットが大きく周辺環境をも変えてしまった。それは通信社や写真エージェンシーから流される写真が無制限に世界を駆け巡るようになったことだ。そこにはボーダー(税関という意味で)がまったく存在しなくなってしまった。フィルムの時代は“デューブ”によってしか流通しな

■マイケル・フェルプス(USA)
北島康介が獲得した金メダル2個は凄
い記録なのに、それを大きく上回る6個の
金メダルを獲得したフェルプスは、まさに
怪物だった。

写真・三船貴光
(2004 New face)



photo by Takamitsu Mifune

かつたので少なくともまだ税関というボーダーが生きていたように思うのだが、現在はまったく存在しない。そういった状況がこれからの私たちをどのようにむしばんでいくのかが心配だ。

出かける前私が耳にした、ある通信社から出版社に持ち込まれた「500カットまで使い放題、20万円」という情報にはあぜんときせられた。私は即座に電卓を叩いた。単価は400円!! 使いたいものがあるかどうかは別にして、このような単価の写真が流通することを黙ってみているしかないのだろうか。

日本にはまだ週刊誌やスポーツ誌などが多くあつて、今のところ海外の出版事情よりはいいのかもしれない。今回IDカードがなくてもチケット取材に行ったAJPSのメンバーもいた。その意欲には感心するとともに、大いに敬意を表するしだいだ。しかし通信社や写真エージェンシーが行っている配信の現状をみてみると、つい“背信”にも見えてくる。これからのスポーツ写真を案じてしまうのは私だけだろうか。

「はい、〇〇です。ええ、野口はそのまわり道をキープしています。もうすぐ、こっちに来ると思います。そっちは？ 室伏は？ あ、そうですか。9時過ぎですね。わかりました」

8月22日、女子マラソンのゴールになっているアテネ市内のパナシナイコ競技場と、アテネ市の北に隣接するキフィアのオリンピック・スタジアムとの電話でのやりとりだ。記者同士、あるいは記者とデスクなどで交わされそうな、マスコ関係者には耳慣れたやりとりだが、しかし、彼らのものではない。電話の主は、観客としてスタンドで観戦しているアテネ在留邦人の方々だった。

ひとつの会場にいると他の会場の様子はわからない。彼らは“地元”のネットワークを駆使して、携帯電話で状況を教えあっていた。しかも、節目節目でのやりとりは、記者顔負け。彼らと一緒にいた私も“速報”の恩恵にあずかったが、こちらの素性はばれて(?)いたので、世界記録



Photo by Ryutaro Makino (2004 New face)

や外国人選手のプロフィール、競技ルールなど、思いのままに質問されて面食らう場面もあった。速報のお礼に、できるだけ答えるように努めたが……とにかく彼らは楽しそうだった。

日本人選手が登場すると大声援を送る。もちろん、応援グッズを振りかざして、である。日の丸印の扇子や团扇にタオ

ル、どこで手に入れたのか、いつのまにか日本選手たちのスポンサー合同特製Tシャツもあった。選手の家族でも個人的な知り合いでもないのに、彼らの声援はとて熱かった。オリンピックとナショナルズの結びつきがそこにはあった、と思う。日本を離れて暮らしている彼らだからこそ、日本を意識し、日本に対する想いがより強く出ていたのかもしれない。

今回、アテネで私が世話になった日本人の友人一家も、実に精力的にさまざまな競技に出かけていた。バレーボールを中心に、競泳、野球、マラソン……。せっせとチケットを購入しては、日替わりメニューで日本チームを追いかけてアテネ狭しと動き回る。仕事が終わって彼らの家に戻ると、小学生になる子供たちからその日見たイベントの報告を受けるのが、私たちの日課になっていた。

考えてみれば、自分の住んでいる街でオリンピックが行われることなど、めったにあることではない。この時期、いつもは猛暑になるギリシャの夏を避けて他所へ出かけているという友人一家も、今年はオリンピック中心の夏になった。子供たちにとっては、競技に出かけ、オリンピック定番のピンバッジ集めにはまり、ママとママの友達でサッカーにやけに詳しいお姉さんと遊んだ、ちょっと変わった夏休み。彼らがオリンピックで目の当たりにした競技の数々は、どんな風に彼らの中に残ったのだろうか。今後、なにかの形になっていくことはあるのだろうか。

在留邦人のオリンピックの楽しみ方。いつもの競技取材とは違う、オリンピックの側面を垣間見た気がした。



Photo by Ryutaro Makino

アテネ夏季五輪2004 Report ② もう一つのオリンピック取材記

文・木ノ原久美 (2004 New face) 写真・牧野龍太郎 (2004 New face)

最新の2006 WM NEWSにドイツワールドカップの組織委員会アンバサダーのオリバー・ピアホフがEURO 2004ポルトガル大会への言葉を寄せています。「大会運営、スタジアム、試合、そして町と人のホスピタリティーに於いて、私が経験したポルトガルの夏は素晴らしい時間であった」と。

この言葉に異論のある人は少ないことでしょう。8都市10会場で繰り広げられたスリリングな試合の数々。スタジアムで働いていたユーロ圏からの多くのボランティアの面々。そしてポルトガルの人々の心あたたまる対応。EURO 2004で見たポルトガルの素顔は、我々に忘れていたものを思い出させてくれたのかもしれない。

画像はデジタルの時代へ (1986~2004)

オリンピック同様、4年ごとのサッカーワールドカップではプレス事情の変化を

肌で感じることができます。記事、画像の伝達手段の進歩はその象徴と言えるでしょう。

TELEXタイプライターからFAXに変化した'86年メキシコ大会。FAXが普及した'90年イタリア大会。ネガフィルムをスキャ

EURO 2004 PORTUGALを 取材して

赤木真二



Photo by Shinji Abagi

ナーでデータ化してPCで送る事が可能になった'94年アメリカ大会。この時点でインターネットは不可欠な通信手段となりました。

デジタルカメラが2割、フィルム・スキャニング・電送が8割を占めた'98年フランス大会。それから4年間でデジタルとフィルムの立場は逆転し、デジタルカメラでの撮影が8割を超えた2002年韓日大会。インターネットの普及は画像のデジタル化に拍車をかけ、フィルムでの撮影は激減しました。

ワールドカップの中間年に開催されるサッカーの欧州選手権(EURO)は大会の規模、メディアの数に於いてワールドカップに準ずる国家レベルの大会です。2004年6月にポルトガルの8都市で行われたEURO 2004では、データ通信の安定とスピードが求められていました。

データ通信の安定と スピードアップ

今大会での独自の調査によると、300人強の登録カメラマンの中で、フィルムユーザーは5人。その割合は2%弱という結果となりました。

当然の如くプレスセンターでのフィルム現像のサービスは無くなり、試合中フィルムを運んでいたフィルムランナーも姿を消しました。長年、大会をスポンサードし、フィルム現像サービスに大きな貢献をしていた、富士写真フィルム(株)の撤退は時代の流れという一言で表現するには厳しすぎる現実でありました。

それに代わり、今大会の試合会場のゴール裏にはローカルエリアネットワーク(LAN)の有線接続用のターミナルが設置されました。同時にポルトガル・テレコムは会場内のどこでも接続可能な無線LANサービスも有料で行っていました。しかしながら、接続が集中する試合のハーフタイム以降、無線LANはスピードと安定性に欠け、また、ゴール裏の有線LANの使用に関しては、登録料が高価だったこともあって欧州の各国エージェンシー数社が接続するにとどまりました。

EURO 2004組織委員会は、大会開始数日間ですぐに現実を察知すると、プレスルームのデスク上に無線LAN配線を急

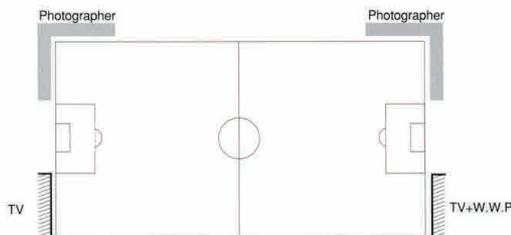
速増設し、カメラマンも記者も、机さえ確保できれば無料でLAN接続が可能な状態に整備してくれました。机上に配線の束がむき出しの状態ではありましたが、この素早い対応でどれだけのプレスがストレスを感じずに配信できたことでしょうか。

UEFAはEURO 2004のプレス登録を全てWeb上の入力に切り替えた事もあり、大会期間中の決勝トーナメントの申請、回答も全てWeb上でのやり取りとなり、LAN環境の整備は必然だったと言えるかもしれません。

撮影スペースの減少

ゴール裏のカメラマンスペースでは、ゴールからメインスタンド側の半分がTVと国際配信通信社数社のカメラマン専用となり、その他のカメラマンは残りの半分からタッチラインの約16メートルというルールになっていました。今後ゴール裏のスペースの確保は深刻な問題となるでしょう。

PCを開くスペース、有線LANの設置など、解決しなければならぬ問題があると同時に、ワールドワイドな大手通信社、欧州各国のインデペンデント・エージェンシーの優遇といったカテゴリー分けの力関係も絡んで個人のカメラマンの立場は決して楽観的ではありません。



日本人プレス

最後に、今回の日本人プレスの登録を見てみます。
(現場での独自の調査)
AJPS会員は記者4名、カメラマン9名で13名取材していました。

<記者>

新聞:朝日 以下 読売、産経、東京、東中、東スポ、日刊、スポニチ、共同通信×2、時事、10社11名
雑誌:サッカーマガジン、サッカーダイジェスト×2、カルチョ、ストライカー、イレブン、ワールドサッカーグラフィック、ナンバー、7社8名
フリー: スポルティベパ、Football

Weekly、TraSpo、他1、4名
海外:中田(オランダ)、その他 元川(wowwow)、2名
合計:25名 内AJPS会員5名(大住、原田、杉山、田村、元川)

<カメラ>

新聞:無し
雑誌:サッカーマガジン、サッカーダイジェスト×2、ストライカー、ワールドサッカーグラフィック、ナンバー、ヤー、6社7名
フリー:Big Friend、KAZPhoto、Spirit Photos、Football Press、Aupa、Far East Press、日刊現代、7社7名
海外:倉井(ドイツ)、石島(イングランド)、鈴井(スペイン)、望月(フランス)、篠田(イタリア)
合計:19名 内AJPS会員9名(佐藤明、大友、清水、今井、赤木、六川、倉井、石島、望月)

今回のEURO 2004ポルトガル大会では、「今後のための実験」が行われた感があります。カレンダーは止まりません。20カ月足らずで開催される2006ドイツワールドカップに向けて、ハード、ソフト両面での準備は着々と行われています。

この原稿を書いたベルリンでも、9月8日にオリンピックスタジアムの新装オープニング試合が行われました。1936年のベルリンオリンピックのメイン会場は68年を経て、最新のスタジアムに生まれ変わっています。

その点、ドイツ組織委員会は確実に物質的な整備を進めています。

オリバー・ピアホフの言葉を借りるまでもなく、ドイツに於いて、町の人のホスピタリティーを感じることを今から期待するのも楽しいものです。

i n d e x

2004 A.J.P.S.報道写真展 地球にスポーツ eye's

赤木真二



熱田 護

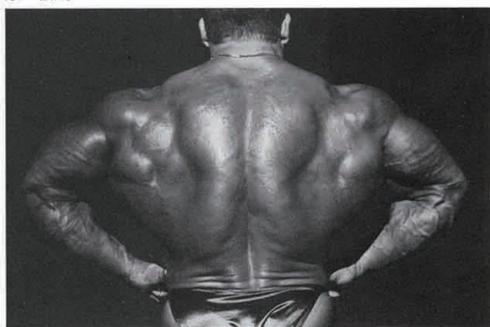
明田和也



■ギリシャ優勝セレモニー Photo by Shinji Akagi



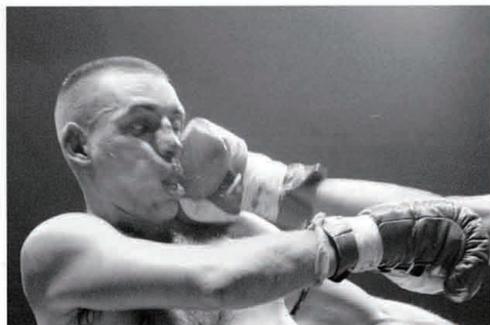
石島道康 泉 悟朗



井上六郎 今井恭司



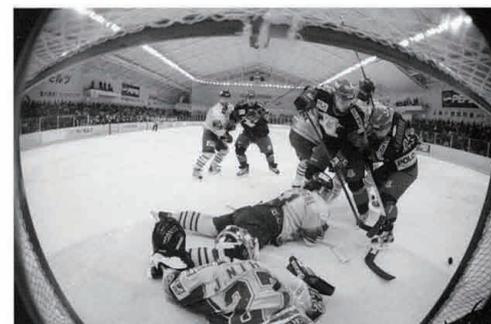
伊藤隆司



乾 晋也



今井秀幸



内ヶ崎誠之助

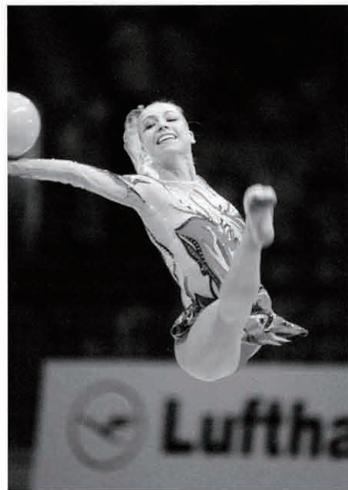
大河原 弘



大下桃子



加藤誠夫 兼子慎一郎



大友良行 奥野雅和



川津英夫



北川外志廣

木下健二 木立 治



小林隆子 小林 洋



久保暎生



黒崎雅久



小柳圭二



権藤和也



澤田仁典 清水和良



末石直義



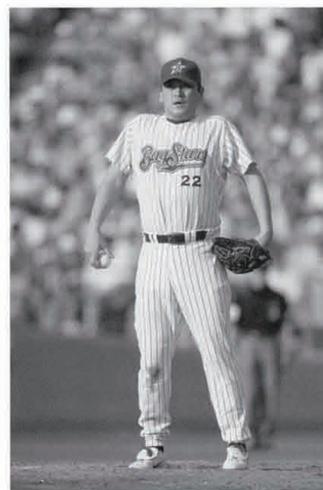
菅沼 浩



菅原正治



砂田弓弦



高沢礼男 高橋 学



竹内里摩子



田中慎一郎



坪内隆直



徳原隆元



柴田 純



田中宣明



富越正秀



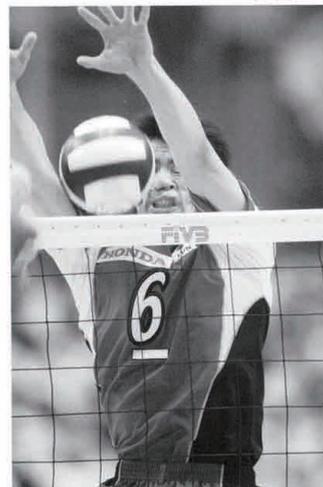
中島光明



中谷吉隆



芳賀伸哉



牧野龍太郎



松本 正



原富治雄



藤田孝夫



水谷章人 水谷 豊



三船貴光



宮野正喜



薬師洋行



梁川 剛



望月公雄



望月 仁



六川則夫

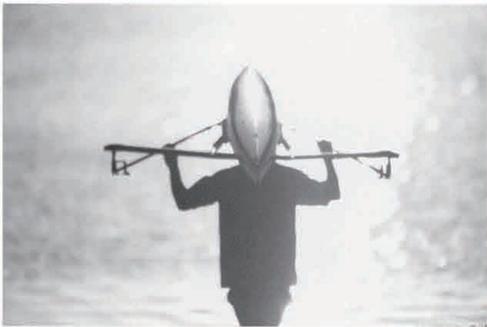
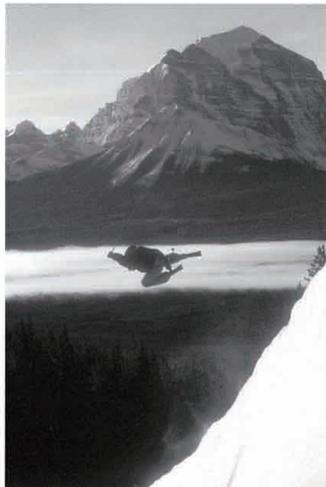


若井晴彦



渡部 仁

渡辺智宏



渡辺正和



和田利光

世界最大の自転車レースと言われているツール・ド・フランス。このレースを追いかけ始めて2004年で5年になった。正直言って、最初は自転車のことなんか何もわからずにフランスへ乗り込んだ。「自転車競技を知るためには、ツール・ド・フランスを知らなければならない」。そう思ったからだ。

実際に行ってみて、徐々にではあったが自転車競技を理解できるようになった。ただ、予想もしてなかったことも理解できるようになった。いや、理解しなければならなかった。

それは、処世術。フランスで生きていくための術だ。ツール・ド・フランスは23日間ある。約1か月はフランスで生活をしなければならない。レースのスタートに遅れないように、ストレスを溜めないように生活するためには、すごく些細なことも学んでいかなければならない。それは、「スーパーの定休日は日曜日」ということだったり、「22時を過ぎるとファーストフード店さえも開いていない」ということだったり。



Photo by Shibo Dobi

もちろん競技中も処世術は必要だ。「朝のスタート地点は、どこで待っていると選手の話の聞けるか?」、「このレース展開だと、〇km地点は何時に通過するか?」などなど。1日中緊張の連続。それが1か月続く。

お陰様で、5年目にしてやっと処世術

が身についたような気がする。街を車で走っていて、どっちの方向にガソリンスタンドがあるか、感覚でわかるようになった。200人近くいる選手の名前は、難なく頭に入る。ツールに集まるメディアは約3000人。その中には、毎年顔を合わせる友だちもきた。ときどき、その友だちに助けられる。それが仕事の成功へとつながる。

考えてみると、ライターになってからいつもそうだった。「書く」ことだけであればいいわけではない。時にはスタイリストもするし、料理をしなければならないこともあった。ツール・ド・フランスだって、地図を読めないと回れない。まさかライター業に、地図を読む能力も求められるとは、思ってもみなかった。

「ツール・ド・フランス記者は1日にして成らず」

この言葉をしみじみ感じる(自分で作った言葉だけ...)。私のツール・ド・フランスは2004年から始まったと言ってもいい。やっと取材に集中できるようになった。ツールは「旅」である。長期間の旅だからこそ、人間の悲喜こもごもが見えてくる。それは選手も然り、メディアも然り。だから面白い。

これからこの旅に挑戦し続けると思う。「取材」ということだけではない。それは「自分への挑戦」でもあるから。

ツール・ド・フランス記者は1日にして成らず

文と写真・土肥志穂(2004 New face)



Photo by Shibo Dobi

<プロフィール>

1971年広島県生まれ。筑波大学卒業後、(株)小学館入社。「小学三年生」編集部配属。1996年に退社し、フリーエディター&ライターに。主に女性誌で執筆する傍ら、'2000年からツール・ド・フランスを追い始め、TV、ラジオの電話リポーターも務める。2004年AJPSに入会。



Photo by Tsutomu Kishimoto

今夏、日本人はテレビの前でスポーツ三昧に陥った。それが、中国で行われたサッカーのアジアカップであり、アテネ五輪である。そして、アテネ五輪終了後、9月からはサッカーのドイツワールドカップアジア予選が再開した。

私はアジアカップを開幕戦から決勝まで取材した。その過酷な取材のためアテ

ネ五輪の取材は辞退。92年バルセロナ以来のテレビ観戦となった。今に始まったことではないが、相変わらずの報道の仕方に目をそむけたくなるばかりだった。他の種目を知らない元Jリーガーや元プロ野球選手、タレント、綺麗どころの女子アナを起用して、バラエティー番組にしているだけだった。実況にしても、私は自転車車のチームスプリント決勝を見てビックリした。日本はドイツに負けて銀メダル。銀メダルは快挙だったのだろう。しかし、テレビでは優勝したドイツの選手が、会場にいた小さな子供を抱き上げ、自転車で乗せてウイニングランをするシーンが延々と流れていた。しかしアナウンサーはひたすら、日本の銀メダルの凄さを絶叫していた。

また柔道競技にはこんなことがあった。確か66kg級だったと思う。イランの選手は1回戦の相手がイスラエルの選手に決まると、試合の時間になっても会場に現

れず乗座した。日本では大きく取り上げられることはなかった。パレスチナに攻撃するイスラエルの選手とは戦えない、というのが理由だったという。そこには華やかな五輪の影で、戦争に苦しむひとたちがいることを教えてくれた。

テレビは視聴率を上げるために絶叫する。新聞や雑誌は部数を増やすために五輪を報道する。そこには本当の「スポーツ報道」などない。

2005年、日本はサッカーのワールドカップアジア最終予選に熱狂するであろう。日本にとって怖い存在になるのは中東の国である。かつて中東の強豪といわれたサウジアラビア、UAE(アラブ首長国連邦)、カタールといった国が衰退し、イランのほか、バーレーン、ヨルダン、オマーンという国がレベルアップし、中東の戦力図は大きく変わった。しかもアジアカップで優勝した日本が、苦戦したのはイラン、バーレーン、オマーン、ヨルダンといった中東勢であることを忘れてはならない。もちろん日本が最終予選に進出していけば、オマーンは脱落している。

だが、日本のメディアは、スポーツ新聞の隅から隅まで読んでも、テレビのサッカー番組を見ても、中東の情報などほとんど見ることがない。現在、日本ではヨーロッパのリーグ戦を見ることが出来る。ワールドカップの予選ならヨーロッパ予選も南米予選も見ることができる。世界のサッカーの情報は氾濫している。しかし、我々は中東のサッカーを知らない。どんな選手がいるのかも知らない。今、大事なことは中東の情報ではないでしょうか。「ワールドカップでベスト8を目指す」というが、しかしアジア予選を突破しなければ、本大会にさえ出場できない。

今夏、アジアカップ、アテネ五輪を見て、改めて「スポーツ報道とはなにか」を考えさせられた。視聴率、部数という数字ではなく、今、何を伝えなければいけないのか、を考えなければならぬ。

(プロフィール)
1957年9月2日生まれ。90年イタリアワールドカップ〜02年まで、4度のワールドカップ取材。90年には、週刊プレイボーイにおいて「日本にプロサッカーリーグ(リーグ)誕生」というスクープ記事を掲載も、今は誰も覚えていない。現在はジーコと中心するつもりで日本代表を追いかけたい。



Photo by Tsutomu Kishimoto

サッカー・アジアカップ2004 Report 2

2004アジアカップを取材して忘れられぬ中国人記者からのブーイング

岩崎龍一 (2004 New face)

はじめて遭遇する光景だった。8月7日、北京・工人体育場。そのミックスゾーンでは、信じられない出来事が起こっていた。

4年に一度、サッカーのアジア最強国を決するアジアカップ。ジーコ監督率いる日本は、いままさに決勝で地元中国を3-1で下し、優勝の喜びに沸き返ったばかりだった。

取材陣にとっても決して楽な遠征ではなかった。灼熱の重慶から済南、北京と約3週間にわたって広大な大地を移動

(プロフィール)
1960年、青森県八戸市生まれ。明治大学卒。サッカー専門誌記者を経て88年よりフリーに。サッカーを中心にワールドカップから少年サッカーまで幅広く取材。これまでで、フランス代表監督エメジャケなど、世界的サッカー関係者を各国でインタビューしている。

する取材旅行。激辛の四川料理に悩まされ、さらに高級ホテルでさえ英語が通じない。さすがに、この国にも食傷気味になっていた時期に、スタジアムの観客全体を敵に回しながらも、この大会を通じて最も強い勝ち方をしてタイトルを連覇した日本代表の活躍は、最後に報われたとの思いがあるのも確かだった。その爽やかな気分が本を差す出来事は試合後のミックスゾーンで起こった。

大会を通して決して快通とはいえない取材活動を行ってきた日本人記者たち。その行為は純粋な気持ちの表れだったのだろう。日本協会会長、川淵三郎キャプテンが姿を現すと、日本人記者団の間からは自然と祝福の拍手が巻き起こったのだった。

しかしながら、次の瞬間、これまでの国際大会では経験したことのない場面にアウトした。その日本人記者たちの拍手を遮るかのように巻き起こるブーイング。

その声の主は、何を言おう中国人の記者たちだったのだ。

中国で行われた今回のアジアカップは、ベストメンバーで臨むことのできなかった、ジーコのチームの驚異的なたくましさよりも、中国全体の日本に対する反日感情がクローズアップされた大会だった。日本に帰ってきてテレビや紙媒体の報道を見ると、中国の観客の過剰な反応が多くを占めていた。しかしながら、そのような中国人の集団的な反日行為が、なぜ起きたか。その根本的な問題について報道していないメディアは意外と少なかったのではないだろうか。確かに両国の歴史的背景が絡んでくる微妙な問題は伝える側にも難しさがある。ただ一つだけいえるのは、今回の騒動が起きたことに限っては中国のマスコミが大きな要因になっていることだけは間違いない。

日本の報道では、日本の国歌が演奏された際にスタンドを埋めた観客からブーイングが巻き起こったと大きな問題になっていた。はたしてそれは大きな問題なのかと自分自身は思う。6月から7月にかけてポルトガルで行われたEUROでも、そのような光景は度々見られた。確かに相手の国歌に対してブーイングをするのはマナーに欠ける行為ではあるが、それはことサッカーの世界ではよく見られる光景だ。一番の問題は、日本の試合のときに記者席で日本の国歌に対して中指を立ててブーイングをしていた地元記者たち。すべての人がそうではないのだろうが、このような記者たちの報道に日常的に触れれば、一般の人たちの日本戦で起こる行為は火を見るより明らかだった。そして、そのような場面を毎試合目の当たりにしてしまうと、はたして北京オリンピックはどうかと疑問を持たずにはいられなかった。

はからずとも7月28日の開幕戦の試合後にAFC(アジア・サッカー連盟)のピーター・ベラン事務局長がこう発言している。「このままでは4年後のオリンピックはむずかしい」と。

その後、この発言は中国側による大きな反発により撤回されたが、政治的圧力を受ける前に素直な感情で発せられたベランのこの言葉は、案外を射ているのかもしれない。

サッカー・アジアカップ2004 Report 1

アジアカップを取材して日本のスポーツ報道を考える

渡辺達也 (2004 New face)



Photo by Tsutomu Kishimoto



男子車いすバスケットボール、日本vsアメリカの熱戦

Photo by Kimio Mochizuki

アテネ・パラリンピック2004

写真・望月公雄 (2004 New face)



開会式、日本選手団の入場行進

Photo by Kimio Mochizuki

一人の人間がスポーツを変えることはないだろう。しかし、その一人のもとに多くの力が集結すれば、サッカーという競技がより魅力的に変わることは、あるかもしれない。

ブラジル男子は昨年、ワールドカップ、ワールドユース(20歳以下)、U-17世界選手権と、同時に3世代の世界タイトルを保持するという、世界サッカー史上初の快挙を祝った。残る世界大会はオリンピック。

しかし、男子はオリンピック南米予選敗退に終わる。「4冠完全制覇」の野望が打ち砕かれた中、ブラジルは残されたチャンスを思い出した。それが女子サッカーだ。

ブラジルには整備された女子リーグが取り入れられた。代表も軽視されていた。そこで、CBFブラジルサッカー連盟がまず行ったのは、ヘネ・シモンエスの監督招聘だった。1998年、ジャマイカをワールドカップに導き日本代表を破ったことで知られるブラジル人監督。彼が就任した女子代表は、アテネまでの半年間、国内外の大会参加や親善試合、合宿を絶え間なくこなした。

合宿中、ヘネは実にオープンにチーム作りを見せてくれた。研究家の彼は、選手の身体的、精神的、技術的特徴を分析し、それをもとにトレーニング器具やサプリメントまで研究した。新たな試みも多い。究極の水風呂クールダウン。格闘技

の要素を持つブラジルのダンス、カポエイラを取り入れたフィジカルトレーニング(ただしこれは、長い合宿中の粋なレクリエーションだった)。また金メダルを呼ぶボールの象徴として、黄色いテニスボールを選手一人ひとりに渡し、大切に持っていれば夢が叶うと説いた。「感情メーター」はユニークだ。「選手達は毎朝起きた時、今日の自分が何色かを付ける。機嫌が悪いと赤を付け、まあまあなら黄、良い日は緑。一人一人の感情を把握し、より良い指導ができるんだ」

こうしてブラジル女子はオリンピックで銀メダルを獲得した。「優勝以外は何もしなかったと同じ」と言われる男子と違い、リーグ戦で日常的に鍛錬する場もない女子が、半年で準優勝に到達した成果は、ブラジルを更に本気にさせた。

CBFは今後、ヘネを軸に女子リーグ創設に乗り出す考えだ。研究家ヘネのプランは、さらに壮大である。

「今はピッチのサイズ、ボールの重さ、試合時間、ルール、全て男子と同じ。女子用のレギュレーションで戦う世界大会が実現すれば、最高のパフォーマンスにつながる。女子サッカーはもっと魅力的な競技になる」

問題は山積みだが、ロベルト・カルロスが女子リーグのスポンサーを出るなど、機運は盛り上がりつつある。ヘネはこう締めくくった。

「実現しないのは、見ない夢だけだ。しかし夢見るだけでは、単なるファンタジー。プランをたて、確実に準備することだ。実現にふさわしい努力をする者には、夢を見る権利はあるからね」

ヘネという一人の人間のもとに力が集結し、サッカーがより魅力的になるための、第一歩が始まることを期待してやまない。

ブラジルは女子サッカーを変えるか!?

藤原清美 (2004 New face)



Photo by Nilton Santos

(プロフィール)

2001年にリオデジャネイロに移住、サッカーブラジル代表、ヨーロッパで活躍するブラジル人選手、国内スポーツを中心に取材しています。フジテレビCS、JSPORTSのレギュラー番組と、ワールドサッカーマガジン連載など、テレビ、ペン両面で活動中。



Photo by Shinichiro Tanaka

2006トリノ冬季オリンピックへの誘い

写真・田中慎一郎 (2004 Newface)

- 上 ヘルマン・マイヤー (AUT) 03/04W-CUP総合チャンピオン 03年12月イタリア アルタバディアにて Canon EOS1-D
- 下左 ラッセ・チュース (NOR) 04年1月フランス シャモニーにて Canon EOS1-D
- 下右 ヘルマン・マイヤー (AUT) 04年2月オーストリア ザンクト・アントンにて Canon EOS1-D



Photo by Shinichiro Tanaka



Photo by Shinichiro Tanaka

<プロフィール>

1968年12月東京生まれ。アルペンスキーの世界カップを中心に、ソフトボール、野球、サッカー、柔道、ラグビーなどを主な被写体とする。今夏はアテネオリンピックを全日程にわたり撮影。冬の訪れを毎年楽しみに「年中黒々」と日焼けして肌しみが心配なこのごろ。

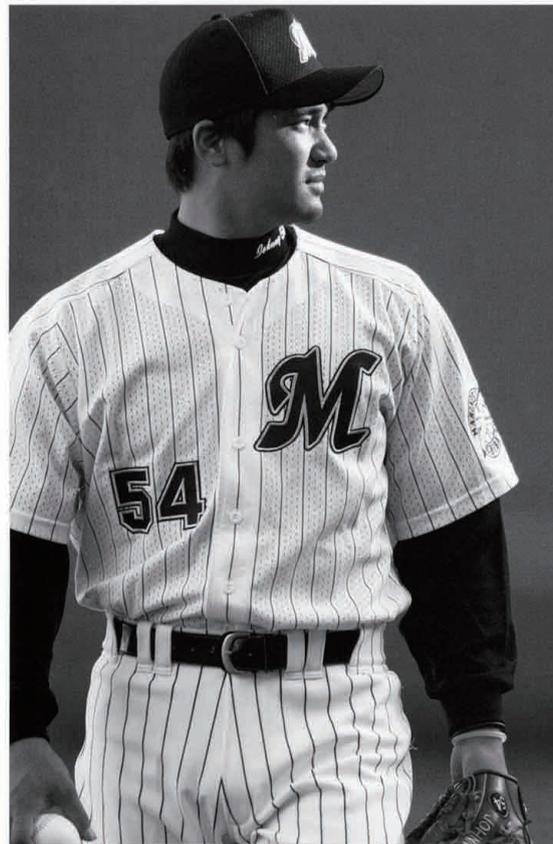


Photo by Kimihiro Sawada

現在パリーグが球団統合、新規参入、そして経営危機による存続危機と大きく変動していますが、やはりロッテのジョニー 黒木投手の存在が忘れられません。僕は今一度、彼の気迫に満ちたピッチングが新生パリーグのマウンドで見られるように切に願っています。

熱い男・黒木知宏 (ロッテマリナーズ)

写真・澤田公典 (2004 New face)

<プロフィール>

1965年1月6日生 (39歳)
脱サラ後1998年より写真業界に参入。出版社写真部、編プロ写真部、新聞社外部契約を経て2001年度よりフリーとして活動開始。

編集後記

白髭隆幸

この夏のビッグイベントのリポートと今年度新入会員の原稿、写真で会報を作ってみました。また、11月に開催されるAJPS報道写真展のINDEXを中心に綴じ込みました。これは写真実行委員会の編集です。

スポーツ界は、新しいイベントを迫って進んでいます。2006年のサッカーワールドカップ予選は世界各地で進行しており、トリノ冬季オリンピックも1年4ヵ月後に迫っています。

メディアの伝達方法も日々進化しています。スピード、そしてクオリティの進歩はまさに日進月歩。毎日毎日が勝負です。AJPS役員も改選期。新しい時代の運営が期待されます。

最後に、玉稿をお寄せいただいた会員諸氏に感謝いたします。

日本スポーツ **22**
プレス協会会報
NOVEMBER 1 2004

編集・発行人 水谷 章人

編集スタッフ 白髭隆幸、石川 聡、田尻 格

編集協力 光本 淳(色えんぴつ)

編集・発行所 日本スポーツプレス協会 (AJPS)

〒112-0013

東京都文京区音羽1-21-10

関根ビル603

TEL. 03-3946-9033

FAX. 03-3946-9033

HP <http://www.ajps.jp>

E-mail: info@ajps.jp

本誌掲載記事、写真を無断で転載することはできません。



日本スポーツプレス協会

Canon

CREATE

PRO-LAB FOR CREATIVE PROFESSIONALS

 **FUJIFILM**



Kodak



KONICA MINOLTA

SHASHIN
kosha

Nikon

OLYMPUS

PENTAX



**TOKYO
VISUAL
ARTS**